

国際協力から示された社会における キリスト者と共同体の成熟

柳沢美登里

始めに：転換期の世界における「キリスト者の成熟」

2022 年 2 月、専門家が「可能性ゼロ」と断言していたロシアのウクライナ侵攻が始まった。当たり前と思っていた世界が崩れる中、「神のとき」を思った。所属する「声なき者の友」の輪は、チェルノブイリ原発事故から主に出会ったユダヤ人牧師が導くキーウのメシアニック・ジュー集会との交流に導かれていた。ミサイル攻撃がいつ来るか判らない礼拝ライブ配信中、突然、画面が消えることがないように祈り続けた。ウクライナの闇を悔い改め、神が愛しておられるロシアの民のための叫びの祈りに「キリスト者の成熟」が浮かんできた。遠く離れていても「このとき」に神の思いを共に祈り、彼らを通して隣人に仕える働きへの連帯が始まっていた。先は見えないけれども、キリスト者が鍵とされる「神の物語」は進む。33 年間の「国際協力」を通して、神に示されてきた「キリスト者の成熟」を考察する機会を感謝したい。

<アウトライン>

- I. 二重の衝撃：キリスト者とその共同体は「良い市民」だったのか
- II. 社会におけるキリスト者個人と共同体の成熟した姿
 - II-1. 万物刷新後の完成された姿：神との完全な交わりにある協働者
 - II-2. 「完成」の一手手前の成熟
- III. 21 世紀の「キリスト者の成熟」に向けて示されてきた要素
 - III-1. 底辺からみえる包括的「神の国」：「隣人愛」と「多様性尊重」

III-2. 天と地の二重のアイデンティティ

III-3. 「永遠」から見る「今」という「神の時」

III-4. 「治めるしもべ」のイエスに倣う

IV. キリスト者の成熟進行中：新たな衝撃を経て

<結論> 底辺からみえる包括的「神の国」が、究極に社会が目指すあり方。天と地の二重のアイデンティティを与えられたキリスト者が賜物に応じて、「永遠」の視点から「今」という「神の時」を識別し、イエスが示された「治める」、すなわち「すべてのものを本来の姿へ回復する神の働きに仕える」という「隣人愛」に携わる、完成一步手前の個人と共同体という「キリスト者の成熟」を論じた。

I. 二重の衝撃：キリスト者とその共同体は「良い市民」だったのか

「聖書信仰」に立つ教会につながり、聖書のことばを日々読むように励まされ、福音書に記されたイエスの生涯、特に社会の弱い立場の人々に寄り添う姿が深く心に留まるようになった。やがて「国際協力」の道が開かれ、90年代初めバングラデシュに赴いた。到着2か月目に事件は起きた。200年の歴史ある教派の総会での理事長選出を巡った大乱闘が新聞の一面に報じられたのだ。教会資産を巡る権力争いだった。当時、私はこの出来事を受け止めきれず、事件を心の奥に封印して、スラムの女性たちの自立に関わった。

やがて、この衝撃から二つの課題を示されていることに気づいた。一つは、キリスト者指導者も非キリスト者の一般社会にありふれる権力濫用に陥ったことだ。西洋の宣教師の指導で集落を作り、周囲の社会慣習や宗教から守られたはずなのに、宣教学者ボッシュが指摘したように、宣教師たちの愛は保護者ぶったものに過ぎず、途上国のキリスト者はその監督下で未成年者のように扱われ¹、彼らは成熟の芽を摘まれたのだ。「良い市民共同体」として、社会の主

¹ デイビット・ボッシュ『宣教のパラダイム転換 下巻—啓蒙主義から21世紀に向けて』（東京ミッション研究所シリーズ4）東京ミッション研究所（新教出版社、2002年）72-73頁

を知らない人々の目に「公の舞台上で暮らす」ように置かれ、キリスト者たちの振る舞いが知恵深いものであるように示されることが、キリスト者共同体の目的のはずだったのに²。2000年代、所属した国際団体で世界最多の宣教師を派遣していた理事国同士が資金と人事に関する制度改革で対立し、分裂した。社会の成功指標の「数の大きさ」や「組織の維持発展」に囚われたように見えた。神はキリスト者個人に「光」として輝く生き方を求められると同時に、「あなたがた」と「キリスト者共同体」にも呼びかけられていた（マタイ5:14-16）。世と同じく人と財という「力」を託されたキリスト者共同体が「世の光」として成熟するには、集団の課題を個人の誠実さに回帰させるメッセージだけでは限界があることに気づかされた。

もう一つの衝撃は、私のうちに無意識の思い込みがあると気づかされたことだ。「『聖書信仰』の『真実で霊的な囲い』の中だから間違いはない。」と思っていた。実際は「正しい人は誰もいない」という詩編記者のことばが、新しい命を古い体にまとうキリスト者の現実だった。教会共同体を組織心理学から論じた H. Santos は「人はその共同体文化で理想を絶対化し、その理想を当然視する」³と説明する。災害が頻発する日本社会では、人々が「同調圧力」で仲間意識を強めて自らを守ると言われる。私は無意識に「正しくキリストにあり、天の国籍を確定されたはず」の自分から見た「内」なる仲間と「外」の人々を区別していた。そのような私に、ボッシュは西洋由来の魂と肉体の分離の克服に取り組み、罪は個人と社会構造の両方にあるとして「神の霊による個人的刷新および社会構造に挑戦し変革するための断固たる取り組みの必要」⁴を示していた。聖書理解と実践を統合する長い旅路に導かれたのだ。

この二重の衝撃は、キリスト者としてのあり方を根本的に考え直し、取り組み直すことを促す神からのシグナルだった。社会での自分のあり方から始まり、

² Christopher J. H. Wright, *The Mission of God—Unlocking the Bible's Grand Narrative* (Downers Grove: InterVarsity, 2006), 378-379 参照

³ Hugo N. Santos, “Church Structure: The Perspective of Institutional Psychology,” in *The Local Church, Agent of Transformation: Ecclesiology for Integral Mission*, ed. T. Yamamori & C. René Padilla (Buenos Aires: Kairos, 2004), 211 参照

⁴ 前掲書、263 参照

共同体のあり方、「権力」の用い方について、社会を歩むキリスト者として、聖書の真理を深め、実践する「成熟」に近づくように課題を与えられていた。

II. 社会におけるキリスト者個人と共同体の成熟した姿

キリスト者はしばしば、自らの文化で規定される「良い人」を「成熟」した姿と置き換えてしまうのではないか。パウロは「今」というイエスの贖い完成後の「終わりのとき」は、「万物刷新」後の「永遠」の前段階であり、理解できることは「ぼんやりと映る」ものにすぎないと説明した（I コリ 13:12）。今、成熟の姿を完全に理解し、変容されることは不可能だけれども、「ケープタウン決意表明」では、イエスはすべての歴史と被造物を治める主であると宣言されている⁵。ここから最初に、キリスト者個人とキリスト者共同体が目指すべき完成された姿とその一歩手前の姿を聖書から探る。

II-1. 万物刷新後の完成された姿：神との完全な交わりにある協働者

黙示録 21 章では、刷新された都で創造主と小羊である贖い主が生ける神殿となり、新しい体に造りかえられた人が創造時のエデンの園にいたように、神に会い、礼拝をささげ、神との完全な関係を回復されて喜びに満ちる状態を示す。新しい体に造り変えられた人は、主イエスと同じくもはや罪はなく、父なる神の思いを透けるように理解し、すべての選択において自らの意思で神の意思を喜び選び取る。神と主イエスの協働者として世界を治め、被造物、あらゆる生けるものはその本来の姿の喜びと、互いに生かし合う喜びに満ちている。神の思いが都を覆い、すべての被造物は主体的に主の思いで生きている。完全に永続する神への信頼が満ちる。

見渡せば、すべての民族・言語族から王であるイエスを花婿と親しみ、崇める人々が集められ、それぞれの諸国の栄光と誉れを携えた花嫁の共同体になっている。喜びのうちに正義と公正だけを行う「新しい一人の人」と、パウロが表現した新たな人類共同体だ。人々は各自の人格がありながら、主イエスを頭

として諸国の多様な誉れを表すと同時に、個人の多様な賜物が見事に調和した「一人」と思える体の一部に連なる。その体は変化のない退屈な日課を行うのではなく、一瞬一瞬の「完全な今」、神と人が協働する王として新天新地を治める（黙示 22:5）湧きあがる喜びに満ちる。主の協働者として治める働きは、ダイナミックな変化を共同体にもたらし、喜びの波が「永遠」に続くのだ。

II-2. 「完成」の一歩手前の成熟

技術革新が加速し、2045 年に人工知能（AI）が人間の知能を超える「技術的特異点」を迎えると予想され、人は底知れない不安を抱える。キリスト者にとっての「今」は、栄光の姿に変えられる万物刷新で神と人との完全な交わりを回復され、協働して被造世界を治めるまでの過渡期の「終わりのとき」である。託された時代にキリスト者は完成までの一歩手前を歩む。その模範として地上を歩まれたイエスは、ヨハネが記したように天の父と別人格でありながら父の思いを完全に理解し、自発的に選択して時を見究めて行動に移された。このイエスに従うキリスト者は地上では水と霊によって新しくされ、イエスを身にまとい、神とのつながりを回復されたと宣言される。けれども、罪の古い肉体に留まるため天の父の思いを完全に理解することはできない。自発的に完全に父の思いを選択して時に適って行動に移すこともできない。イエスの死と復活で神の恵みの業は完成した！けれども、聖書を各時代や文化背景を極めて神の思いを究めようとし、黙想し、聖霊の満たしを祈り、神のみ心を悟って行動しようとしても、理解も行動も「完成」には至らない。神の恵みにより赦された者として欠けを認め、地上を歩まれたイエスの姿を頭に描きながら神と人の前に遡って今日も歩む。イエスはたとえて、目を天に上げずに胸を打って悔いた徴税人を義とされた。パウロも自分こそ最大の罪人であり、死者の中からの復活を「すでに得たのでも、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようと追及している」（ピリピ 3:12）と告白する。一方、古い肉体に閉じ込められているからといって自己卑下や自己憐憫に浸ってはいない。主が十字架上で死に三日目に復活されたことで、地上の全領域、社会のあらゆる領域で主の主権が確定した。目には見えないけれど、主イエスが王である「神の国」がすでに全地に到来したのだ。だから、キリスト者は社会の置かれた場でイエスを

⁵ 『ケープタウン決意表明』日本ローザンヌ委員会訳（いのちのことば社、2011 年）20 頁

王として、人と被造物の霊的、身体的、社会的、知性すべての包括的回復という父なる神の働きに賜物を用いて参与するように招かれている。

新しい体のメシアに劇的に出会ったパウロは、主による贖いの成就、聖霊にある主の臨在の現実と（旧約）聖書を当時のユダヤ人最高の知識で統合し、人を含めた全宇宙の贖いを完成させた主イエスを王、頭、礎石と捉え、ユダヤ人と異邦人を包摂する「新しい共同体」、さらに「天にあるものも地にあるものも一切のものが、キリストにあって一つに集められ」（エペソ 1:10）、キリストをかしらとした再統合に至るという包括的な理解に達し、異邦人宣教を始めた。「新しい共同体」には神と人に仕えるために驚くほど多様な賜物と個性を付与された各人が集められ、主の働きに用いられて喜ぶとパウロは理解した。助けを必要とする人々の存在は、誰にも頼らないことが一人前と考えた人々に、弱い人々の中に「神のかたち」の貴さを見出して支えることで、共に生かされる喜びが満ちる神のご計画に気づかせた。神を知らない社会では無駄と思えるすべてが神の役に立ち、いらないものは何一つなく、喜びになるという神の創造の視点からパウロはイエスにある「共同体」を「体」にたとえた（I コリ 12 章）。ユダヤ人と異邦人から成る一つの新しい人、つまり、主を礼拝する和解した全民族の信仰者から成る新たな人類への刷新が始まった壮大な理解を提示し（エペソ 2 章）、呻き続ける被造物も含めた全宇宙の回復に参与している（ローマ 8 章）と説明する。神を崇めるすべての民が母語を貴び、互いを尊重しあい、人と被造物すべてのいのちを生かすそれぞれの美しい文化の側面というそれぞれの栄誉が組み合わされていく。すべての民族と言語族から神を崇める人々が集められ、神が願う各文化の側面を相互に尊重する全世界の共同体の完成に向けた一步手前の「今」というとき、この方向へとお互いを建て上げるように招かれていることをキリスト者は聖書から知らされる。

完成の一步手前ではどの時代にも、イエスが語られたように社会には貧困、格差、不平等や差別に呻き喘ぐ人々がいる。人間の理論と意思で神が願われる共同体の姿に到達することは不可能だ。けれども、神は回復に向けたご計画を推進し、今日も働いておられ、キリスト者はその働きに参与するように「今」も呼ばれている。それは「自己実現」でも、他者からの「承認」を目指すものでも、主の十字架の姿から短絡的に導き出された「禁欲」の姿でもない。キリ

スト者は、それぞれの賜物と神からの使命と導きにより、「今」、社会の中で置かれた場で人と被造物すべてを神の栄光のために生かそうと神からの喜びに満たされて労するのだ。自分で決めた目標に向かうのではなく、たとえ全容が判らなくても、神に導かれて神の大いなる回復と刷新の御業に参与する。神の召しに忠実に応えているかどうかだけが問われている。遜って他者から学び、人と被造物を生かす姿は「相互成熟」と呼べるのかもしれない。

III. 21 世紀の「キリスト者の成熟」に向けて示されてきた要素

キリスト者は遣わされたそれぞれの国・文化に置かれて「完成」の一步手前のときを歩む。そこには、神が喜ばれる「人と被造物を生かす」慣習と神が願われない「力」の使い方や人や被造物を滅ぼす慣習という清濁併せ呑む価値が混在する。社会で「人と全被造物を神の国にふさわしく回復する神の働き」に協働するキリスト者個人と共同体が「成熟」するために示されてきた 4 つの要素を、前述したアウトラインに従って考察する。

III-1. 底辺からみえる包括的「神の国」：「隣人愛」と「多様性尊重」

すべてを深遠な目的で導かれる神は、御子イエスをユダヤ社会の質素な労働者家庭に誕生させた。イエスは 30 年間、上層とは無縁な辺境で過ごし、周縁に押しやられる痛みや矛盾を熟知して、「神の国」宣教を始められた。

顧みられない人々に仕えることを示された私に、最初の海外奉仕で求められたのは「子どもの健康の知識」という専門の断片だった。ところが、実際にスラムの女性たちの支援活動で求められたのは、専門で切り分けた「断片」の知識以上に、拡大家族や経済状況など各分野が相互かつ複雑に作用する包括的な「社会」での回復という視点だった。包括的存在である人同士が補完し合って地域共同体で生きる、という全体からの視点による関わりが真実の「行動変容」をもたらすのだ。人の内側から社会や環境全体のすべての分野に至るまで切り離すことができない密接さでつながっていると「神の国」は表していた。

その後、2010 年に仲間たちと創立し、「包括的隣人愛実践」を推進する「声なき者の友」の輪を通して、社会の底辺で抑圧を体験して主に呼ばれ、「神の国」宣教に従うインドの中堅リーダーに出会った。彼から現代版「神の国」の

包括性を示されたのだ。彼は社会の底辺層に生まれ、10代前半で人間未満の扱いを受け、主イエスに出会ってから常に全体を見渡して考え、実践をしていた。ことばでの伝道で訪問した多くの家庭で、差別されて学校に行けない子どもたちに出会い、彼らのための学校運営に奔走した。次に導かれた福音の文脈化では、儀式的文脈化ではなく、19世紀の先進的なインド人教育家・社会改革者が提唱したインド古来の神概念をイエスの地上の歩みにつなげた文脈化、そして靈性に留まらず、社会面、知性面、衛生などの身体面という包括的な人の回復を進めようと地域教会を基盤にした「尊厳回復を推進するプロジェクト」を彼は私たちに提案した。ある教会で何年も真面目なクリスチャンと認められていた一人の若手リーダーは、この文脈化によって福音の本質を知り、初めて自分の「罪」に目が開かれたのだ。それまで、慣習として下の階層のキリスト者の友人に粗末な食器を使っていたことを差別とは思わなかったという。ついに、家族の反対を押し切って粗末な食器を家から捨て去る大胆な行動に出た。このプロジェクト後、全体を見て民を弟子とする召しを歩む彼は、社会に影響を与えることができるメディアの重要性を示され、隠された歴史の真実を伝える雑誌を発行するグループで活動した。さらに、インド建国の英雄とされるガンジーによるヒンズー教の教えでは、民衆の真の平等には至らないことを立証する論文を書き、「神の国」理解によりローザンヌ運動に携わるインド人神学者たちに認められた。イエスが体験したように「神のかたち」の人の尊厳を軽んじる社会全体を底辺から見究め、「神の国」の回復に関わり続けたのだ。

バングラデシュのスラムの女性たち、そして、インドの底辺出身のキリスト者の歩みに伴走する過程を通して、周縁での痛みを知る底辺から、回復すべき「神の国」が最も鮮明で包括的に見え、「神の国」宣教への参与とは何かを教えられてきた。彼らと共に歩み、祈り、励まし、「神の国」の広さと深さを味わうキリスト者の「相互成熟」を共有させていただいた。

この「神の国」建て上げに欠かせないのが「隣人愛」だ。自分の文化基準で読み込みやすい「隣人愛」を、イエスはどのように実践しただろうか。イエスの他者との関係をみると、日本社会の理解とは異なる「隣人愛」の姿が浮かび上がる。第一に、隣人の願いだと思い込み「至れり尽くせり」行った挙句、行

う側は疲弊し、受け取る側は困惑・依存する悪循環に陥るものではなかった。また、イエスは一人一人がその人に備えられた異なる認識や感性があると理解し、他者の尊厳を認め、日本人にはまどろっこしく聞こえる「治りたいか」と問いかけられた。「他者」の尊重は、始めに相手は自分とは異なると認識することから始まる。「自分自身のように隣人を愛する」とは、「あなたと私は違います。私はあなたとは違う存在として大切にされたいので、私と違うあなたとして尊重します。」と関わるものと思える。「違い」を強調されると疎遠に感じる日本人にとって、この「違い」は神が造られた証しであり、尊重の基盤だと意識することは重要だ。福音書のイエスは、天の父がその人に願われた本来の包括的な姿をその人と共に見出し、回復する作業に携わられた。イエスはその人自身が願っていることを問いかけ、自ら一步を踏み出すように促された。神は人の体の必要を備え、生ける神に信頼し、人や被造物を生かす豊かな知識を身につけ、互いに補い支え合うように包括的に造られたことを理解し、それぞれの人格を尊重し、新たな体に刷新される永遠のいのちという究極の希望に根差して、現在の回復をサポートしたのだ。さらに、「神を愛し、自分自身のように隣人を愛する」ことの延長線上に、神が造られた被造物すべてを尊重して世話するように、人に託されたたと聖書が語っていることを心に留めたい。

「国際協力」で様々な外国籍や現地のスタッフと関わり、「神の国」の特徴である「多様性」の意味を体感した。「違い」を持つ人々が集まるからこそその豊かさだった。日本人の私はバングラデシュ現地スタッフの間で穏健とみられた。あるとき、外国人キリスト者スタッフから私が上司の指示に従順すぎるという「過度な秩序重視」を指摘された。聖書が語る「秩序尊重」以上と映ったのだ。日本では、江戸時代後期に人間関係の教えを説いた儒教が家族関係に浸透した。「大宇宙なる天的永遠の構造を反映する倫理的関係をこの地上の小宇宙において実現する」⁶とした儒教は社会秩序の中に倫理的アイデンティティを提供し、秩序維持に無意識の価値が置かれ「空気を読む」文化を形成する。

⁶ ロバート・リー『日本と西洋キリスト教—文明の衝突を越えて』（東京ミッション研究所選書シリーズ5）東京ミッション研究所訳（東京ミッション研究所、2005年）134頁